



山村 光久

9月20日の午後2時から深志教育会館でのコンサートです。古楽を聴く会と山村医院の主催。会費3000円。これまでフルートを中心に何回かコンサートを企画してきました。すべて古いフルートが主役です。バロックフルートをフラウト・トラヴェルソ(横のフルート)と呼びます。キイが一つ付いた円錐管で、バッハやモーツアルトの時代のもので、演奏者はオランダ、デン・ハーグ在住でトラヴェルソ奏者の築城玲子さん。2002、2003年、サイトウ・キネン・フェスティバル松本には当時バロックプログラムがあり、彼女は桐朋音大の学生で参加しています。その年の秋、白馬村で彼女の師匠の有田正弘氏とのデュオコンサートを開き、トラヴェルソではバツハの息子フリーデマンの名曲、モダンのフルートに持ち替えてヒンデミットのデュオなど楽しい会でした。

その後、年に1、2回帰国してのコンサートは最近では2022年がルネサンスから20世紀までの7本のフルートを持ち替えての演奏。2023年はテレマンの「無伴奏フルートのため」の12のファンタジア、これこ

昼下がりの古楽

そモダンのフルートで吹くことと意味が違うもの。そして昨年は「トラヴェルソとクラヴィコードで疾風怒濤」と題して、バツハの息子や弟子たちを中心としたプログラム。クラヴィコードとそれに寄りそうトラヴェルソの弱音の競演が素晴らしいものでした。ちなみに彼女はバツハの大曲「マタイ受難曲」に300回も参加しています。

今回はプラッティというイタリアで生まれドイツで活躍した音楽家の作品です。私は聞いたこともありません。バッハより少し若いプラッティは当時の最新の楽器であるフォルテピアノのための曲を作っていて、彼の「フルートのためのソナタ」に、フォルテピアノで伴奏したら、という彼女の伴奏を長く受け持っている渡邊孝さんの提案でした。音を出してみると良い曲だったので即決したとの話です。

古楽は今や普通に聴かれるようになりましたが、彼女がモダンフルートから古楽科に変更したのは、トラヴェルソの音の魅力もありますが、言葉で表せない音楽世界で、音符の裏側に感情だけでなく修辭学的意味があり、それを言葉で説明できることに興味を魅かれたと言います。コンサートに先立ち、ルネサンスフルートから現代のフルートまで10本ほどを展示し、私の師匠、塩嶋達美さんによる駆け足でのフルートの歴史の解説つき。午後のひととき、最上の古楽演奏を楽しんでいたきたいと思います。

(やまむら・みつひさ、医師 松本市)